基地近辺余話

森田七郎

〜おー寒むこー寒む、山から小僧が泣いて来たー、何んとって泣いて来たー、寒いとって泣いて来たー、

冷めたい北風の吹く夕暮れ。だれかがこの歌をうたい出すと、だれもがすぐに、ハケ（崖）上の畠の向うに見える山（松や雑木の林）の姿を思い浮かべた。現在の横田基地となっているところである。

八高線は山の中を走っていた。人影の無い日光街道（現国道十六号線）を横切り、再び林の中に足を踏み入れるとあたりは森閑としてその奥は深く、それはどこまでも続く果てしない樹海のようにも思えた。天狗さまが出るゾー、狐に化かされるゾー、などと大人たちにおどかされながらも、春には小鳥を追い、山ツツジを採った。秋には栗を拾い、抱えきれないほどの茸（きのこ）を採った。昭和の初期—これは筆者の子供のころの話である。

やがて満州事変が起こり、さらに支那事変へと戦局が拡大されるにつれて、世はだんだんと軍一色へと塗りかえられていった。静かな里—ここ福生の町も、にわかにさわがしくなってきた。いつしかハケ上の「山」は切り開かれ、そのあとに陸軍航空審査部が設置され、やがて軍飛行場へと変貌していった。町中のそちこちでカーキー色の軍服姿を見るようになり、「福生もいまに、立川に次ぐ第二の軍都になるらしい……」そんな噂が人々の口にのぼるようになった。戦争がいよいよはげしくなり、都内から疎開をして来た人が「ここも危ないー」と、あわてて他所へ移ってゆく光景もみられた。

やがて軍人の天下も終焉を告げ、日本は敗戦を迎えた。軍施設をめぐって、敗戦時のどさくさまぎれの横行はいずこも同じ——。それはさておくとして「これはえらい事

になった—」長い戦争が終ってほっとする反面、それはだれしもが抱くこれから先の不安であった。「鬼畜米英」がこの町にもやって来る……？

「進駐軍て何んだい……？」

「連合軍のことだよ」

ついこのあいだ「終戦」などという新しい言葉が生まれたばかりである。人々の戸迷いも無理はなかった。さまざまなデマが乱れ飛んだ。こうした住民たちの不安をよそにやがて立川、昭和、福生へ—と、占領軍がやって来た。アメリカの軍隊である。わが町、福生ハケ上の旧軍の施設ももちろんそのまま接収された。そうして、この時から基地の街—福生がスタートしたのである。

それからすでに四十余年の時が流れた。

米空軍横田基地。それは、日本の本土における空軍基地としては最大の規模ともいわれている。

戦後に生まれた人々にとっては「生まれた時から基地はすぐそこにあった」のである。だから、空飛ぶ米軍機の姿も、広大な飛行場も、アメリカ兵の姿も、すこしも異様とは感じないのが普通であろう。だが、当時の大人たち（子供も含めて）が、初めてその姿に接した時はまさに驚きの連続といったところであった。そうして多くは双方の誤解のもとに、住民とアメリカ兵との間には、さまざまな珍談奇談が生まれていったのである。

敗戦直後から数年間、そしてまた今日にいたるまで、基地にまつわる話題は悲喜こもごも—、それこそ数かぎりなくある。それでは、その中の幾つかをこの紙上に再現してみるとしよう。まずはとしよりの世迷い文と思っていただいてもけっこうである。

乾いた砂利道の上を、ジープが砂塵を巻き上げて走ってゆく。砂利を満載したダンプが、すさまじい唸りとともに次々と通り過ぎてゆく。

「ウーム、これじゃあとても戦争に勝てるわけがねえや」

「いまにー、河原の砂利や砂が無くなってしまうんじゃあねえのか……？」

人々は遠巻きにこれらを眺めながら囁き合った。

接収とともに、基地の整備拡張工事がはじまったのである。部隊も次々に増強されているらしい。町の中にもちらほらと米兵の姿を見るようになった。

「あいつらは何をするかわからねえから、あまり近寄らないほうがいいぞ……」

「なァーに、やつらだって鬼でも蛇でもないだろうー、そんなに恐れることはねえやな」

こうしてしばらくの間は、人々の疑心暗鬼がつづいた。

しかし、このような大人たちの思いとはべつに、自分たちにはけっして危害を加えないであろうことを敏感に察知した子供たちは、なんのおそれげもなく無邪気にかれらに

接していった。片言の英語を覚えるのも子供たちは早かった。こうした光景を見るにつけ、固かった周囲の大人たちの表情もだんだんとほぐれていったのである。

さてここで一人の老人に登場してもらおう。

町のなかの、ある神社近くの家に、一人暮らしの老爺が住んでいた。名を「権さん」という。杉皮葺きの古びた神社は、町の氏神であり、その周囲に鬱蒼（うっそう）と生い茂る松や老杉の木立は、鎮守の森である。神社の北側の坂道を堂坂といい、すぐ下を流れる小川を堂川といった。

権さんの本業は大工職とのことだが、ほとんど近所との付き合いもなく、あまり人と口をきいたこともなかった。しかし権さん自身には、大事な仕事があった。石垣積みの一段高い境内の一角に、古い鐘楼があり、かれはその釣り鐘を毎日、朝に夕に「ゴーン、ゴーン」とつくのである。だから人々はかれのことを「鐘（かね）つき権さん」と呼び、また「権爺」ともいっていた。ところが権さんにとって甚だ不本意なことには、戦争の激化にともなって、この釣り鐘が軍に供出されてしまったのである。

鐘つき堂は残ったものの、肝心の釣り鐘が無く、堂のなかには棕櫚（しゅろ）の木でつくった一本のつき棒だけが空しく宙に浮いていた。すっかり意気消沈した権さんであったが、それでも相変らず、時折りやって来る参詣人の世話をやいたり、小まめに境内の掃除などをやっていた。そして、遊びにやって来る近所の子供たちに向っては、時々持ち前の荒っぽい言葉で怒鳴ったりしていた。境内は子供たちの格好の遊び場でもあった。そして子供たちにとって権さんは常にテキであり、また時には仲間であり、さらにはいたずらの対象でもあった。

「おい権爺、鐘がなくなっちゃって、つまんなかんべ？」

「うるせえなッ、このガキめら！」

まずはこんなあんばいである。

戦争が終り、いつまでたっても釣り鐘はもどってこなかった。そんなある日であった。境内の方から権さんの家の方に向って子供たちが、

「おーい、権爺ーイ、権爺ーイ」

と呼んでいる。やがて戸が開いて、ヌッと権爺の姿が現われた。例によって筒袖の着物に兵児帯をしめ、尻をはしょったお馴染みのスタイルである。

「なんだ！」

いつもと同じ荒々しい声だ。

「アメリカが、呼んでるぞオー」

「なに?!……」

一瞬、権爺の顔がこわばった。そして、戸がピシャリと閉まって家の中に消えてしまった。

「オーイ、権爺ーイ、アメリカが呼んでるよおー」

子供たちはなおも呼びつづけた。

「オーイ、ゴンジーイ、ゴオーンジイー」
アメリカ兵も子供たちの口真似をした。
やがて、そろそろと戸が開いて、再び権爺の顔が現われた。真剣そのものの表情である。
「おらあ……、アメリカなんぞに用はねえ……」
今度は、声にあまり力がなかった。だが―、日頃子供たちの前で威張っている手前もあり、アメリカと聞いて怖じけづいていたんでは沽券（こけん）にかかわってくる。腹を決めたらしく、権爺はぎゅっと帯を締めなおし、さらに高く尻をはしょって神社の石段をのぼって来た。
「何んだ……?!」
五、六人の子供たちと、二人のアメリカ兵を前にして、やや緊張した面持ちながら、それでも権爺は精いっぱいの威厳をみせた。
「アメリカが写真をとるから、鐘をつけってよおー」
権爺はしばらくキョトンとしていた。がやがて、
「ヘダラこくな！　鐘もねえのにつけるわけがねえじゃねえか、人をばかにしやがって……」
と、口をとがらした。もっともである。
だが、カメラを構えたアメリカ兵や子供たちに何度も催促をされ、権爺は仕方なくシブシブと堂の前に足を運び、つき棒から下がっている綱を握った。アメリカ兵はいろいろと注文をつけてきた。
「うまいゾ権爺ーィ」
子供たちが一斉にはやしたてた。
主の無い堂の中を、棒が何度か空をきった。さまざまなポーズをとらされた権爺は、世にも神妙な顔をしていた。
写真を撮り終えたアメリカ兵は何度も「サンキュー」と言いながら、ポケットからタバコを取り出し、封を切らずに権爺の前に差し出した。だが権爺は、
「おらあ、タバコなんぞすわねえ！」
と言った。しかしすぐに思いなおしたらしく、素早くそれを手にすると、何やらブツブツと独り言をいいながら家に帰っていった。間もなくアメリカ兵も去り、子供たちも散っていった。そうして、この日あたりから、神社付近にアメリカ兵が現われると、権さんの出番もだんだんと多くなっていったようである。
それから数日後のことである。鎮守の森のあたりで「ダーン、ダーン」という時ならぬ銃声がした。境内一帯は権さんの縄張り圏内である。権さんはさっそく家を出た。きょうは付近に子供たちの姿はなかった。石段を登り、すぐそばの古い石灯籠に身を寄せた権さんは、そーと森の奥の方をうかがった。すると、神社のすぐ裏手の木立ちの間を猟銃を手にしたアメリカ兵の一人が行ったり来たりしている。まだ、奥の方にも何人かいるらしく、話し声が聞こえた。突然、間近で銃声がした。権さんはハッと身を固くし

た。急に森の方で話し声が高くなってきた。権さんはそろそろと社殿の方へ近づいて行った。と突然、目の前の社殿の横からアメリカ兵が一人すッと現われた。権さんは、思わずギョッとなってその場に立ちすくんだ。

「××――、×××――」

大声で何か言いながら、アメリカ兵は権さんの方へ近づいて来た。権さんはあわてて踵（きびす）を返そうとしたとたん、地面から盛り上がった松の木の根につまずき、危うく転びそうになった。アメリカ兵がまた何やら言った。と同時に、いきなり権さんの目の前に、なにか褐色の物体がすーと飛んで来て、ばさッと足元に落ちた。「ひえッ」と権さんは肝（きも）をつぶさんばかりに驚いて、思わずそこから二、三歩飛び退いた――。一言、二言、アメリカ兵はまた何か言いながら、そのまますたすたと森の奥の方へ去って行った。権さんの前に投げられた褐色の物体は一羽の山鳩であった。やがて森の奥の話し声も消え、車のエンジン音がだんだんと遠のいていった。

さてこの一羽の鳩が、その日の権さんの夕食の膳にのったであろうことはまず間違いはない。それが証拠には、翌日、庭の片隅にそれらしき羽毛が散乱しているのがみられたからである。こうして、権さんはどうやらアメリカ兵に接する度に、何んらかの収穫を得たようである。

「奴らも、まんざら悪でもなさそうだナ……」

権さんは内心そう思ったかもしれない。

だがしかし、そうそううまい事ばかりがつづくわけがない。それからまた数日後のことであった。例によって、きょうも朝から境内の方で子供たちがさわいでいる様子であった。と急に、家の前の方でアメリカ兵らしい声がした。

権さんはいそいで戸を開けて外に出た。すると目の前に大男が二人、それぞれビールを片手に何やら大声で話し合っている。大分酔っているらしく、足元がおぼつかない。

とその時、なんと！　大男の一人がいきなり目の前の堂川に向ってシャーシャーと放水を始めたではないか－！

どうやら下水と間違えているらしい。一瞬あっけにとられた権さんの頭に、一挙に血がのぼった。

「この野郎ッ！　何んてえ事をするんだッー！」

それは怒髪天を衝かんばかりの勢いで、老いたりとはいえ、まさに権爺の面目躍如たるものがあった。

権さんが激怒するのも無理はなかた。この小川の水は大事な飲料水であり、また夏は冷めたく冬暖かいこの清流を、付近の人々も生活用水に利用していたからである。

権さんの凄まじい剣幕にびっくりした大男たちは、何んの事やらわけがわからず、目を白青させながら二、三歩たじろいだ。しかし放水男の方は、開始直後すぐにそれを停止する事は甚だ困難らしく、権さんの怒声でビクッと一旦止まったものの、また引きつづき放水が続行された。清流

の上を、白い泡が帯状になってフワフワと流れていった。
「やめろッ！　このバチ当たりめがー！」
権さんは放水男につかみかからんばかりであった。
「ホーッ！」
と奇声を上げ、ついに大男二人は逃げ出した。遠くから権さんの大声を聞いて子供たちが集まって来た。
「どうしたッ？　権爺ーイ」
「どうもこうもねえッ、氏神様の水に小便なんぞたれやがって、畜生―！」
権爺はいかにもいまいましそうであった。二人のアメリカ兵は途中で後ろを振り向き、ガッツポーズなどを繰り返しながらも、やがてすごすごと立ち去って行った。
「でも権爺は、アメリカをやっつけたんだからエライや」
子供たちは口々にその〝武勇〟をたたえた。しかし権爺は少しも渋面をくずさずに、荒々しい動作で家から一つまみの塩を持って来てあたりに撒いた。小川はもとどおりの清流となり、サラサラとかすかな音を立てて流れていた。
人々はいつしか「進駐軍」にも馴れていった。かれらに対する呼び方もいろいろであった。「アメリカ」「アメちゃん」「アメ公」「ヤンキー」などなどである。そして、「この分じゃあ、やつらも五、六年は引き揚げないかもしれないな…」などと話し合ったりもした。
進駐後間もなくから、基地の整備拡張やその他のために米軍は多くの労働力を必要とし、近隣の町村に動員がかけられた。近辺の若者をはじめ、体に閑のあるものはみな基地に働きにいった。いまだ企業も数少なく、近くに勤め口のないとき、基地は格好の働き場所でもあった。
やがて昭和二十五年夏、朝鮮戦争の勃発とともに基地はにわかに騒然としてきた。兵員も急きょ増員されているらしく、日夜爆音が絶え間ないほどであった。
この頃から急に町にも多くのアメリカ兵を見かけるようになった。そしてその多くは女性連れであった。女性のほとんどは日本人であり、派手な化粧と服装をした彼女らはアメリカ兵と腕を組みながら町の中を濶歩した。こうした光景はやがてそちこちの農家の庭先あたりでも見られるようになった。「オンリー」と称する彼女らに対して、家の中や物置などを改造したりして貸す家が増えてきたのである。部屋代は畳一帖分――千円が相場であった。
やがてこのオンリーとは別に、主に青梅線の東側や、ハケ上近辺の畠の中のそちこちに、いわゆるハウスと称する米軍家族専用の貸家が次々と建てられていった。こうして、町はいよいよ国際色豊かとなっていったのである。
敗戦のショックから立ち直ってすでに数年。いまだ食料もとぼしい時代ではあったが、人々の表情にも生気が溢れみな懸命に働いた。福生は坂の多い町である。農地の多くは坂の上にあった。長沢の金さんが肥料を積んだリヤカー

を引いて、ハケ上への坂道を汗をふきふき登っていた。通りがかった親切なアメリカ兵が車のあとを押してくれた。が、人糞の匂いに驚いて、すぐに飛び退いてしまった。

親切な甚伍さんが、近くのハウスに、畠からとりたての新鮮な野菜をプレゼントした。が、出てきた金髪のマダムは「ノーサンキュー」と断わった。せっかくの好意を無にされながらも「アメリカは、青物を食わねえのかな…？」と、甚伍さんは人の好い笑いを浮かべていた。

町に、年に一度の夏祭りがやってきた。

福生神明社の夏祭りである。まず宵宮（よみや）当日、神社前に勢揃いした各町内の御輿（みこし）は、宮司のおはらいをうけた後、それぞれの町内へ散ってゆく。真夏の西日をいっぱいに浴びながら「ワッショイ、ワッショイ」という威勢のいいかけ声と共に町内を練りあるいてゆく。

近隣の町や村からも、この祭りを目当てに見物人がやって来た。その昔、てんしやば（停車場）といわれた福生駅前の通りは、祭り見物の人々がもっとも多く集まるところである。各町内の御輿は、この駅前通りを目指して続々と集まって来た。見物人の中には、この光景を物珍しげに眺めているアメリカ兵の姿があちこちにみられた。

流れる笛太鼓の音、行き交う人々のざわめき、通りはまさに祭り一色であった。一台の御輿に数十人。汗にまみれた若者たちが、肩をよせ合い声を張り上げ、右に左にと練りあるく。「ワッショイ！　ワッショイ！」のかけ声は、いよいよ高く低く、おしよせる波のようにあたりを圧した。祭りはいまや最高潮であった。

と、突然。近くでケラケラという甲高い女の笑い声がした。派手な身なりの若い女性である。すぐ傍らにアメリカ兵が一人、真面目な顔をして立っていた。アメリカ兵が何か言うと、女はまたケラケラと笑った。

すると、近くにいた見物人の一人で、中年の男の人が、そっと彼女に近づいていって、

「何がそんなにおかしいんだね…？」

と聞いた。すると彼女は、

「だってさァ、彼が変なことを言うんだもの――」

「ヘンなこと？」

「そう、なんであんなに大勢の人がネ、あんなに大騒ぎをしながらアレを担ぐんだってー」

「……？」

「それよりもね、トラックに積めば、一人で楽に動かせるじゃないかってー言うのよ、アッハハハハ――」

女はまた笑いだした。男はニガ笑いしながら二人のそばを離れた。山車（だし）が近づいてきた。笛太鼓の音も一段と高く、祭りはますます盛り上がっていった――。

さて。福生と基地とは、もうすでに長い付き合いとなった。この付き合いがいつまでつづくかはだれもしらない。

「この分じゃあ五、六年は引き揚げなかんべ」と言っていた古老たちももうすでにこの世に亡い。山が消え畠も消えた。そして、金網のフェンスの向うは別の社会となった。今そこに往昔を辿るすべもないが、基地の将校クラブ付近に昔日の松林の面影をかすかに想起することができる。

南北にのびる滑走路。冬は概ね南から北へ、夏は北から南へと飛行機は飛び立つ。今日もまた空に爆音がする—。

（もりた・しちろう　長沢在住）

既刊案内

福生市史資料編

中世
寺社

中世編　福生市域を支配した領主たちの文書を中心に採録し、とりわけ大石氏・北条氏照の文書を網羅している。

寺社編　民衆と宗教のつながりを示す史料を掲載し、近世の多摩地域の宗教史を考える上で貴重な史料集である。

A5版　五七二頁　三八〇〇円　送料三〇〇円

福生市史研究誌

年2回発行

みずくらいど　1
座談会「町談から市史へ」　玉川上水と福生など

みずくらいど　2
植生からみた福生の自然　熊川村の村明細帳類など

みずくらいど　3
「水喰土」を自然地理学の立場から調べる　熊川治郎左衛門を追って　福生の帰化植物考など

みずくらいど　4
新聞記事にみる福生昭和史の一断面　福生村の宝蔵院について　福生第一国民学校の防空日誌について　熊川村の宗門人別帳について　など

A5版　各四五〇円

福生市史編さん室　〒197　福生市本町五番地
☎0425（51）1511内207